

学校運営の舵を取るトップに聞く

LEADERS

File 04 山田 亨

Toru Yamada

茨木西高校 校長

「自ら気づく人を育てる」
生徒だけではなく、自身を含む
教員に向けた言葉です



やまだ・とおる

1956年生まれ。新潟大学工学部卒業、同大学院工学研究科修士課程修了。大阪府立和泉工業高校、茨木工業高校(現 茨木工科高校)を経て、2007年より3年間茨木西高校に教頭として勤務。東住吉総合高校(教頭)を経て、2012年より現職。

まとめ／堀水潤一 撮影／有田聡子

**生徒が進学する大学に
足を運ぶ労を惜しむな**

私は長く工業高校に勤めてきました。やんちゃな生徒を相手に悪戦苦闘もしましたが、3年生になれば彼らの髪型はリーゼントから横分けに変わります。全員就職が当たり前の時代、学校全体がびりつとすることです。私も足を棒にして企業回りをしました。大手企業が高卒者の採用を見送ったとしても、「いつかまた採用してもらえはす」と信じて通い続け、生徒の進路保障に結び付けてきました。

大学訪問も、企業訪問同様大切です。本校の場合、進学先の4年制大学の数は毎年50校ほどですが、実際には5〜6大学に集中します。その他の大学へは数人ずつ進学する程度であり、そうした大学へは先生方の足も遠のいてしまいます。けれど、資料だけで大学の雰囲気は掴めません。せめて卒業生が進学した大学くらいは自分の目で確かめるべきというのが私の考え方です。生徒がその大学のどこに魅力を感じたのかを共有し、大学の先をとともに考えていくのがキャリア教育であると思います。

そんななか、大学の向こうにある社会を意識させるため、近隣の大学が夏期に実施するキャリア教育プログラムに生徒を参加させる高次連携事業を始めました。本校赴任後、キャリア教育の必要性を感じていた矢先、複数の大学の協力を得て実現したものです。初年度は希望者制にしたため参加者が偏りましたが、昨年は2年生全員が大阪成蹊大学、1

年生全員が大阪人間科学大学を訪れ、特別講座を受講しました。いわばキャリア教育のアウトソースですが、校内の事情が整った段階でカリキュラムに落とし込み、独自のキャリア教育を展開したいと考えています。

校長の限界が学校の限界

本校の教育方針は、「茨西PRIDE」。「志をカタチに」を合言葉に、「自ら気づく人を育てる」というものです。「茨西PRIDE」とは、教頭時代、生徒会担当の先生が作った、生徒が一つになるためのキヤッチフレーズですが、数年後、校長として戻ってきたとき校内に定着していたことに嬉しさを感じました。そこで、「茨西PRIDEバッジ」を制作。顕著な活躍をした生徒に校長賞として授与することにし、その第一号としてバッジをデザインしてくれた生徒に贈呈しました。

これまで、生徒の「志をカタチにするため、自習室・英語ルームの設置、卒業生による学習サポーター制度、修学旅行先のグアムへの変更などに取り組んできました。今後、キャリア教育のいつそのの充実に努めたいと考えています。そのためには教職員の力が必要です。「校長の限界が学校の限界」と自分に言い聞かせていますが、私の掛け声だけでは不十分。3年前に「メンターチーム」を立ち上げ、教職経験5年以下の教員を中心にテーマを決めた事例研修を実施しているのもそのため。「自ら気づく人を育てる」とは、生徒だけではなく、自分自身も含め、教員に向けた言葉です。

茨木西高校
(大阪・府立)

1976年に99番目の大阪府立高校として茨木市西方に設立。全日制普通科(男女共学)、生徒数932人(2015年4月1日現在)。2015年に創立40周年を迎えた。